



地方新聞の役割と SDGs宣言

株式会社岐阜新聞社
代表取締役社長 矢島 薫

岐阜新聞は今年、創刊140年を迎えました。これを機にSDGs宣言をしました。地方に生きる地方新聞の使命は、ニュースを伝えることはもちろんですが、地域に貢献することです。

岐阜県、特に美濃地方は、地理的には東西の分岐点に位置し、古くから物流、情報が多く集まる場所でした。そのため天下分け目の戦いが3度行われました。1回目は関ヶ原も舞台となった古代最大の争乱、壬申の乱。2回目は南北朝時代の青野ヶ原の戦い、そして3回目が関ヶ原の戦い。この地に暮らす人々は、戦いが起きる度、振り回されました。これは県民性にも影響したのかもしれませんが、「騒がず、動かず」、「よそ者への警戒心は解かず」、「決して腹の内を見せることはない」という気質と言われます。

戦国時代には、美濃は土岐源氏の拠点として栄え、下剋上になり斎藤道三、織田信長が登場。「美濃を制する者は天下を制す」と言われ脚光を浴びました。江戸時代になると一転、大きな藩はなく、戸田氏、奥平氏の10万石が目立つ程度。実際は尾張徳川家が13万石を持つほか、家老の竹腰、石河の両家がそれぞれ3万石、1万石を所領。岐阜市には岐阜奉行所が置かれ、岐阜商人が尾張藩を鵜飼で接待していました。現在も電車で20分の地に大都市の名古屋市があり、消費行動を含め影響は大きく、経済的には無視できません。

都市の魅力は、経済的な規模が判断基準の全てではありません。日本の文化を構成しているのは、地方の文化です。岐阜県は飛山濃水。多くの観光地を抱え、清流長良川、金華山、鵜飼、中山道、高山祭など、美しい自然や風土に根差した文化があり、県民の誇りであることは間違いありません。一方で岐阜市も活性化に向け手をこまねいているわけでもなく、2007年には繊維産業が衰退した駅前に、住居を伴う高層ビル「岐阜シティ・タワー43」を建設。商業施設、放送局、福祉医療施設も併設しました。近隣の柳ヶ瀬地区には、大型マンションが相次いで建設されています。子育て世代の岐阜市への流入人口は近年、流出人口を上回っているという統計も出てきました。

コロナ禍で2年が過ぎ、暮らしや社会の在り方は大きく変わりました。直接的な人的交流も難しい時代になりました。ただ、街づくりは、人づくりや交流によって地域に活力を生み出すことも一つの手法です。地方紙としての役割は、ニュースを伝えること、スポーツ、文化などイベントで人を呼び込むこと。そして、地域住民を巻き込み、街に元気を取り込むことがどうやったらできるか、考えること。岐阜新聞のキャッチフレーズが「アイ・ラブ・ぎふ」から発展、「ウィ・ラブ・ぎふ」と言えるように努めていきたい。